

## はじめに

- 多武峰 奈良県桜井市 明治時代まで天台宗延暦寺末寺  
明治以降、談山神社
- 大織冠 藤原鎌足の像  
聖霊院に安置される鎌足の木像は、凶事や異変の予兆として破裂のあとを示すと信じられ、天下の崇敬を集めた  
『多聞院日記』永禄10年(1567)6月17日条  
「多武峰大織冠の像、卯月二十五日戌の日戌の時に御破裂なり、(中略)藤花もってのほか開きおわんぬ、大凶事と」

## 1 秀吉の関白任官と秀長の入国

- 天正13年(1585)7月11日 秀吉関白任官  
『公卿補任』天正13年  
「内大臣 正二位 平秀吉 五十 三月十日任、七月十一日関白となす、平姓を改め藤原姓となす」→藤原秀吉として関白任官
- (天正13年)7月8日 青蓮院門跡尊朝の書状 秀吉家臣、前田玄以宛て  
『華頂要略』  
「多武峰領継ぎ目の朱印、今般申し入れたくそうろう、(中略)ことに内府(秀吉)藤氏のことにそうろう条、かたがた御神忠御懇祈これに過ぐべからずそうろう」  
→藤原氏として多武峰の保護をもとめる
- 天正13年閏8月18日 筒井氏が伊賀へ
- 天正13年閏8月25日 多武峰の武器没収  
『多聞院日記』天正13年閏8月25日条  
「多武峰扱い調うか、昨夕、弓・槍・鉄砲・具足・甲・大小刀、惣山の衆、ことごとくもって進上のため持ち上がる」  
→多武峰内で争いが想定 秀吉政権による扱い(調停)がおこなわれた結果
- 天正13年9月3日 秀長入国  
『多聞院日記』天正13年9月3日条  
「秀吉兄弟、上下五千ほどにて入られおわんぬ」

## 2 多武峰の分裂

### ●天正13年9月4日 麓へ移住

『華頂要略』

「今度談山寺領六千石寄附せらる、ならびに山上の坊舎ことごとくもって移さるべきのあいだ、寺僧ら麓に移住すべきのよし、関白殿命ぜらる」

『多聞院日記』天正13年9月7日条

「多武峰去る五日ことごとくもって逃散し、あい果ておわんぬ、形のごとく老衆・行人残ると云々」→老衆・行人と若衆との争いが想定 若衆が逃散

『多武峰論旨長者宣聚記』

「多武峰落ちる、半乱半代のていたらくなり」

### ●天正13年10月 秀長家臣、横浜一庵

『談山神社文書』(天正13年)10月3日横浜一庵書状

「当寺知行の帳渡し申べくそうろうあいだ、早々たしかなる仁躰御越しあるべくそうろう、しからば郡山近辺へ御寺御引きなさるべきのよし仰せ出されそうろうあいだ、この方に坊舎御立ちそうろう衆へは、六千石を渡し申すべくそうろう、左なき衆へは一切渡すまじくそうろう」

『当代記』天正13年

「十月、多武峰へ秀吉公より人数を指し立てらる、すなわち多武峰滅亡」

郡山→新寺・新峰(新多武峰) 多武峰→本寺・本峰・古寺

## 3 新多武峰

### ●天正13年9月 「藤原姓を改め豊臣となすと云々」(『公卿補任』)

### ●天正14年(1586)正月

『談山神社文書』天正14年正月11日三輩一同連署起請文

「一、今般大織冠社、郡山に到り御遷宮あるべきについて、三輩一味同心のこと、  
一、大織冠御新社造営のあいだ、いささかもって疎略なく、馳走あるべきこと」  
→すぐには実施されなかった

### ●天正15年(1587)11月晦日 秀長病気

『多聞院日記』天正15年11月晦日条、12月5日条

「大納言殿煩い大事とて、今暁郡山内衆ことごとくもって見廻に上洛」

「大納言殿煩いことなる儀なしと云々」

●天正16年(1588)3月26日

『談山神社文書』後陽成天皇綸旨

「来月三日、郡山に至り、大織冠遷宮のよし、聞こしめされおわんぬ」

●天正16年4月3日 大織冠遷宮

『多聞院日記』4月3日条

「多武峰大織冠郡山へ今日宮移りこれあり」

#### 4 秀長の死と大織冠の帰座

●天正18年(1590)3月3日 秀長病氣重くなる

『多聞院日記』天正18年3月3日条

「大納言殿煩いすでに死を深く隠すや、おのおの申さる、(中略)悪瘡にて人に対面せざるゆえに死去というかと申す説これあり」

●天正18年9月晦日

「煩いいかにもしかるべからずと見えたり」(『多聞院日記』同日条)

●天正18年10月4日

「秀長長病ただごとならず、一段と祈禱あるべきのよし、関殿より仰せ入れらる」

(『多聞院日記』同日条)

●(天正18年)10月吉日 豊臣秀次

『談山神社文書』豊臣秀次書状

「今度の宿願の意趣は、大和大納言秀長卿、当病本復においては、大織冠先々のごとく、御帰山たるべし」→すぐには実施されず

●天正18年10月20日 秀長死去のうわさ

『多聞院日記』天正18年10月20日条

「はや今暁秀長は死去、これにより秀吉は朝飯も食わず」

●天正18年12月15・18日 大織冠の帰座計画

『多聞院日記』天正18年12月15日・18日条

「多武峰大織冠来る十八日に寺へ還御、(中略)もつてのほか御たつたりの子細これあるゆえと云々」

「大織冠今日還御と沙汰のところ、来る二十八日と云々」

### ●都状(とじょう)

陰陽道で泰山府君などを祭って寿命の延長を祈請するときにたてまつる祭文

→天正18年10月吉曜日

→『多聞院日記』10月18日条

「大納言煩い一大事あいきわまるのあいだ、泰山府君の祭修せらるべきか」

→「秀長五十一」 天正18年に秀長は51歳とみる説

→慶長8年(1603)2月 徳川家康都状(『土御門文書』ほか)

「家康六十一歳」 実年齢の数え60歳ではない、一年の起点を立春にもとめた結果

→元和2年(1616)4月17日死去

『本光国師日記』『義演准后日記』『御年七十五』(満74歳)

### ●天正19年(1591)正月22日 秀長死去

『多聞院日記』天正19年正月23日条

「大納言秀長卿昨日二十二日に死去と云々、五十一才」

### ●天正19年正月29日 秀長葬送

『多聞院日記』天正19年正月29日条

「早旦より大納言葬送(中略)京衆・高野衆・当国諸寺・甲乙人見物衆以上人数二十万人もこれあるべきか、野も山も人くずれなり、(中略)火屋ともに一円焼きおわんぬ」

## おわりに

### ●秀長死後

『当代記』天正19年

「十二月(中略)大和大納言死去以後、多武峰かつがつ寺僧還住、ただし寺領は前々の十物一なり、これはこの度大納言逝去のこと、大織冠の罰をこうむるのよし、時の人いうのあいだ、かくのごとしと云々」

『多聞院日記』天正20年9月15日条

「大光院殿煩いにつき立願のところ死去しおわんぬ、その詮なし、(中略)大織冠もまた郡山へ帰らるべきか」

→大織冠ふたたび郡山へか

### 【参考文献】

黒田智『中世肖像の文化史』ペリかん社、2007年

河内将芳『戦国仏教と京都』法蔵館、2019年

遠藤珠紀「徳川家康の誕生年について」『戦国史研究』86号、2023年

河内将芳『図説 豊臣秀長』戎光祥出版、2025年